

令和6年度

北海道教育大学
附属函館幼稚園だより

NO. 3【号】



「痛かったね」

北海道教育大学附属函館幼稚園長 五十嵐 靖夫

大きな声で泣いている園児を「痛かったね、よく我慢したね」と先生が声をかけています。幼稚園では、時々見かける光景ですが、実はこの声かけがとても大切です。自分の気持ちを他者が言語化してくれると人はとても落ち着くのです。幼児に対しては、家庭でも幼稚園でもお母さんや先生方は、泣いている理由を本人に聞く前に、状況を推測して「痛かったね」「悔しかったね」「悲しいね」と声をかけます。自分の気持ちをお母さんや先生が言語化してくれることで、子どもは「自分の気持ちをわかってくれた」と思うのです。

ところが小学生になると、状況が少し変わります。子どもは泣いていると「なぜ泣いているの？」と聞かれるようになるのです。お母さんや先生方から「ちゃんと教えてくれないとわからないよ」「何があったのか教えて」と聞かれることが増えてきます。でも泣いている子が自分の状況を説明するのは、とても難しいことです。私は中学校に勤めていましたが、校内で興奮し、時には暴れている生徒に対して生徒指導の上手な先生は、「頭にくることがあったんだろ？」とまず生徒の気持ちを言語化してから理由を聞こうとしていました。私たちも同じです。腹立たしいことがあった時に友だちに電話して「それはひどいね。頭にくるよね」と自分の気持ちを言語化してくれると少し気持ちが落ち着きます。

子どもの成長に合わせて対応を変えていくことは必要です。でも、子どもの気持ちを言語化してあげることは小学生、中学生になっても大切にしてほしいと思います。「先生、美容室に行ってきたんですけど・・・」と言われ、女子学生の気持ちを言語化できない私は日々苦勞しています。